

Vol. 151 2017.3.16

理事長トーク Top Interview

第11回
看護・リハビリテーション研究会を終えて

医療法人社団 健育会 理事長 竹川節男


 一人ひとりの健康感が、
ビジョン実現の原動力です。

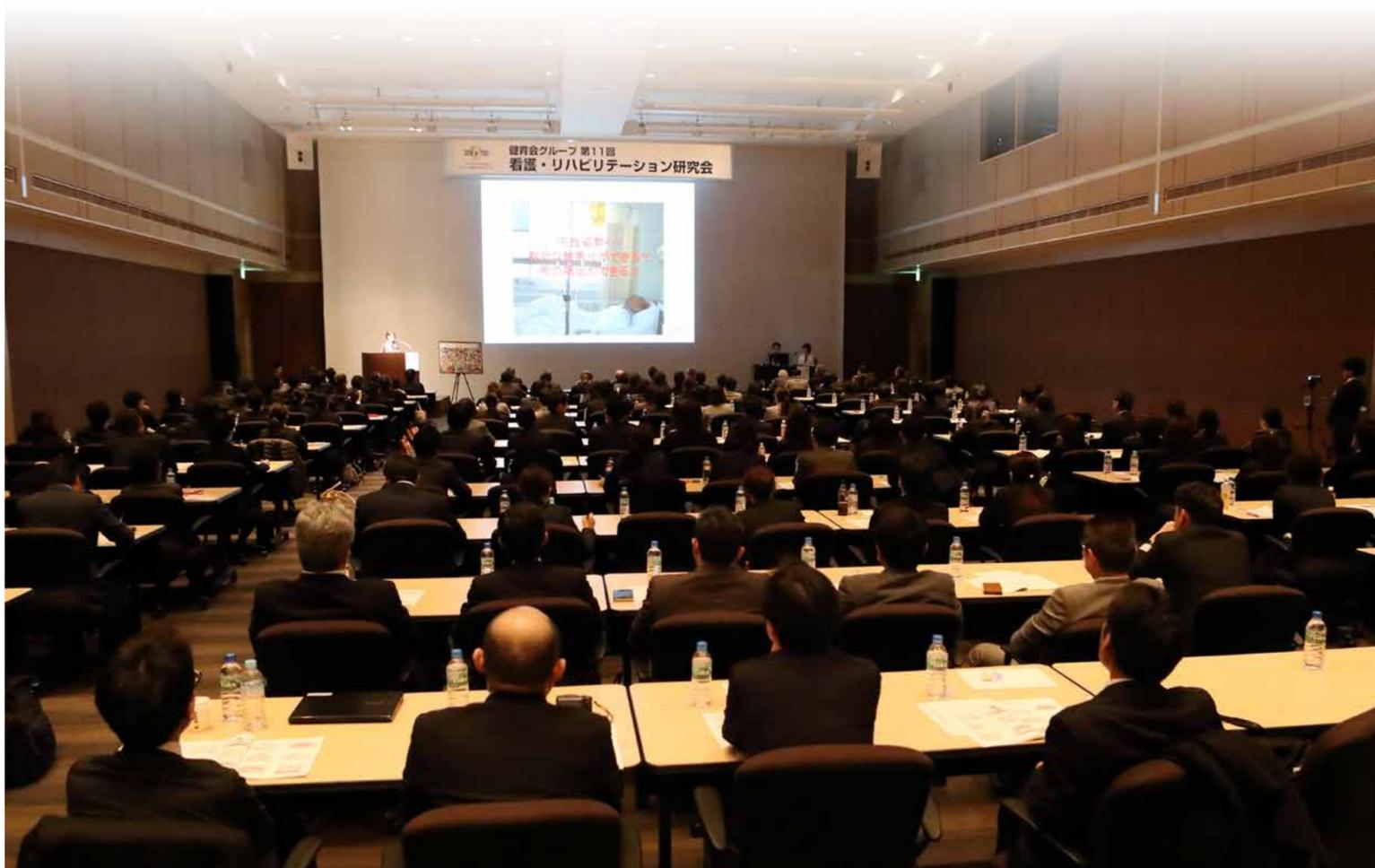

 健育会グループ 第11回
看護・リハビリテーション

2017年3月11日（土）、春の訪れを感じる晴れやかな青空のもと、東京コンファレンスセンター・品川において、第11回看護・リハビリテーション研究会が行われました。

この研究会は、「医療専門職は、論理的思考・統計的な視点を身につけた科学者であるべきである」との考えから、質の高い医療を継続的に提供していくために、各病院・施設のセラピストと看護師がそれぞれチーム単位で研究テーマを選定し、1年を通じて研究した成果を学会形式で発表する場です。

まず初めに、NPO法人『口から食べる幸せを守る会』理事長 小山珠美先生をお招きし、「口から食べる喜びをサポートする包括的スキル」という教育講演を賜りました。

小山先生の講演では「安全のためという考えが、患者さんの口から食べる幸せを奪っている」「口から食べることをサポートすることは、人間の尊厳を守ることであり、より幸せに生きる権利を守ることである」という話がありましたが私も同感しました。





以下、小山先生のご講演で印象に残った点です。

- 摂食嚥下障害の原因や誘因は「人的環境要因」もかなりあり、これは介護看護による予防、回復が期待できるということである。
- 摂食嚥下障害患者の食べたい願いが実現できるための要素は、「医療従事者の食べることへの意識改革と食支援へのスキルアップ」である。
- 「観察眼」と「複眼的思考」が大切である。「観察眼」とは、食べる力を回復させるために何ができるのか、どうすれば食べられうのかを注意深く観察して問題点を突き詰めること。「複眼的思考」は、自分だったら、自分の家族だったらどうしてほしいかを考えること。観察眼と複眼的思考を持って行動していくことで、技術が磨かれていく。
- 食べるということは「よりよく生きること」である。生命の長さを伸ばす医療福祉から、生命の希望を伸ばす「人に優しい高齢社会へのパラダイムシフト」が必要である。



健育会グループでは介護のバリューとして「ご利用者には輝きの1日を」と掲げていますが、先生のお話を聞きながら、口から食べる支援が「輝きの1日」の実現につながっていくものと再認識しました。健育会グループの看護師、セラピストの皆さんには小山先生のおっしゃるメソッド、スキルを身につけ、今まで以上に口から食べる支援を積極的に行って欲しいと感じました。

また、先生のお話の中で、「観察眼」というお話がありましたが、それはまさに**今回の研究会で大切にしている論理的思考にもつながっています**。その点においても、**研究を通じて成長していくことが、より良い介護・看護につながっていくことへの皆さんの自信にしてもらえれば**と感じました。

講演の後は休憩を挟み、リハビリテーション部門7演題、看護部門7演題の14演題の研究結果が発表されました。

リハビリテーション部門研究発表

座長：ねりま健育会病院 院長 酒向 正春先生



食形態の変更に舌圧値が及ぼす影響

石巻健育会病院 高橋 聡美



脊柱・骨盤骨折患者に対して

免荷式トレッドミルトレーニング (BWSTT) を用いた治療法の検討

花川病院 西山 駿斗



慢性期脳損傷患者の中枢性運動機能障害に対する 水治療法の有効性

熱川温泉病院 櫻井 靖一郎



脳卒中患者における

PolypharmacyがFIMに及ぼす影響

竹川病院 木下 亮



寝たきり状態に近い患者の呼吸・循環評価について ～パルスオキシメータを用いて～

いわき湯本病院 武田 裕吾



入院患者へのリハビリ介入により転倒リスクは軽減するか

石川島記念病院 藤間 香苗



A病院における大腿骨近位部骨折の自宅復帰因子の検討

西伊豆健育会病院 羽田 匡伸

看護部門研究発表

座長：横浜市立大学 医学部看護学科老年看護学 教授 叶谷 由佳先生



冠動脈CTにおける検査イメージが患者に与える効果
～検査オリエンテーションを映像化する～

石川島記念病院 里村 牧



回復期リハビリテーション病棟におけるベッド・車椅子間乗降時
見守り解除アセスメント指標の検証

花川病院 大平 みどり



FIM「トイレ動作」に着目した動作自立への考察

竹川病院 佐藤 裕太



医療療養病棟における
スキンテアハイリスク患者の発生要因の調査

石巻健育会病院 小山 友紀



e-ラーニングの学びを実践に生かすための
グループワーク効果

西伊豆健育会病院 伊東 陽子



看護・ケア計画一元化の継続による
介護職員の行動の変化

熱川温泉病院 竹田 知里



温泉を取り入れた足浴が睡眠に及ぼす影響

いわき湯本病院 松本 ヒサ子



リハビリテーション部門の座長を務めていただいた酒向先生からは、「ご発表を聞き、各施設ともに忙しい臨床の中で、一生懸命にデータを集め頑張っているというのがよくわかりました。非常に素晴らしいと思います。大事なのは、**リハビリテーション部門だけで研究を進めていくのではなく、多職種みんなで話し合って患者さんを評価しながら研究データを出していくことです。**患者さんには当然疾患がありますから医師の要素が必要です。さらに、ケアに関しては看護の要素、余暇時間の使い方などに関してはケアワーカーの要素、そしてセラピストの関わりがあると思います。当然ながら研究はセラピストが中心となって進めていくわけですが、患者さんを中心に関わる専門職とともに話し合っていくことで、さらにいい発表になっていくと思います。引き続き期待しています。」との講評をいただきました。



また、看護部門の座長を務めていただいた叶谷先生からは、「今年も様々な着眼点で研究が行われました。研究会の回も重ねてまいりましたので、例えば昨年の研究の結果から、さらに問題点を解明していこうというような、継続性が出てきているのではないかと思います。研究というのは必ずしも派手なものではなく、地道に一年間かけても、少し解明されたかなというようなものです。ですから、**継続するということが本当に大事だ**と私は思います。このような研究を継続していける環境にあるというのは健育会グループの素晴らしさであり、またその成果がだんだんと実ってきているのではないかと感じました。今年特に嬉しかったのは、石川島記念病院が初めて研究発表というところまで成果を上げて、立派に発表を行って下さったことでした。去年もお話しさせていただきましたが、**急性期病院の学会発表は多いのですが、リハビリ、療養病床、地域包括ケア病床の研究はあまり数がなく、みなさんの研究は非常に貴重**です。次のステップとして、研究をさらにブラッシュアップして、全国の学会にチャレンジして健育会グループの力をアピールして欲しいと考えています。」との講評をいただきました。



最後に私からも、以下のような話をしました。

「皆さんの発表に関して、全体的に質が向上してきていると感じています。特に、**研究テーマが日常業務に非常に密着しており、その日常業務を改善していく示唆を与えるものだった**という点が評価できると感じています。発表の仕方、そして内容も概して良かったのですが、考察の部分や対象を選ぶ際にやや論理的な考えに欠けた発表がありました。**研究というのは、論理的な思考過程を勉強すること**につながります。その点については、研究に関わるメンバーで客観的な議論を行い改善して行って欲しいと考えています。

また、発表された研究については、先行研究があつてのフォローアップ研究であることがほとんどです。我々のグループの研究発表も11回を重ねてきたわけですから、そろそろ原著に値するような研究が出てきて良いのではないかと思いますので、その点について今後に期待しています。

今年のキャッチフレーズは「一人ひとりの使命感が、ビジョン実現の原動力です。」と掲げています。忙しい日常業務の中で研究を行っていくことは、使命感がなければできないことだと考えています。そういう意味で今日の研究会では、皆さんの使命感の高さを感じました。本当に、ご苦労様でした。」

私からのコメントは、参加された皆さんには厳しいものと感じられたかもしれませんが、これは皆さんに大変期待していることの表れです。今回の研究会では、看護部門・リハビリテーション部門とも、座長の先生方からのご指摘も的確であり、また質疑応答についても議論を深めるものが増え、さらに有意義な研究会になってきていると感じています。研究会での学びを生かし、使命感を持ってさらに高いレベルでの研究を実現して欲しいと思いますし、その成果を積極的に外部の学会に発表し、グループとして医療・介護の発展に寄与してゆきたいと考えています。

